

# 道なき道をさがし

—アフリカから中東、そして……—

経済貿易研究所主催  
2014年12月3日（水）13：00～14：30  
神奈川大学1号館502会議室

座談会参加者：後藤 晃（経済学部教授）  
鳴瀬成洋（経済学部教授）  
山本博史（経済学部教授）（司会）  
柳澤和也（経済学部准教授）  
横川和穂（経済学部准教授）  
松村 敏（経済貿易研究所所長）

**【司会】** それでは、恒例の座談会をこれから行わせていただきます。最初に、松村先生のほうからご挨拶をいただきたいと思います。

**【松村】** 経済貿易研究所では、数年前から定年退職される先生を囲んで座談会を開き、研究や研究生活の回顧などを記録に残しておこうという企画を始めております。今回の後藤先生の場合も、これまでの約40年以上にわたる研究を振り返るという趣旨のお話をお聞かせいただくということで、とくに後藤先生のご専門である中東研究を始められたきっかけやその展開など、いろいろお話しいただければと思います。

振り返ってみますと、1990年代初頭の冷戦体制終結後も、世界経済や国際関係は激動の連続であり、とりわけ中東をめぐる情勢は世界から注目を浴び、また世界経済と社会を大きく揺さぶってきたわけですし、この点は当面これからも同様でありましょう。経済学部のどの分野の研究者にとっても、こうした現状や研究動向の理解は不可欠と思われるの



（松村敏氏）

で、後藤先生がどのように研究されてこられたかや、さらに後輩のわれわれへの提言などをお聞かせいただければと思います。それでは、よろしく願い申し上げます。

**【司会】** それでは、これから座談会の内容のほうに入っていきたいと思います。最初に、後藤先生のほうからこれまでの本学での足跡をお話しいただけれ

ばと思います。

**【後藤】** 以前、松村先生から地域研究の展望というテーマでと申し出を頂いたのですが、展望などあまり描けないし十分な準備もしていませんので、個人的な歴史のようなことをちょっと語らせてもらえればと思っています。

**【司会】** これまで後藤先生が行ってこられた地域研究の歩みとといいますか、先生の研究を振り返っていただきたいと思います。また、過去のことと同時に今後の展望のほうもお願いいたします、いろいろ考えられていることがおありだと思いますので。

**【後藤】** 自分のことを語るチャンスはなかなかないので、いい機会を頂いたなと思っています。中東地域の研究をやるようになった経緯から話すことにしましょうか。

**【司会】** 学生時代、どういうことをされていたのかとか、あるいは先生のお年だと大学紛争などで、さまざまな影響を受けられたと思いますし、あるいは、院生のときとか学生のときの論文作成の秘話とか、どうして中東研究に進まれたのか、そのきっかけなどお話しただければと思います。先生が東京大学東洋文化研究所にいらっしゃったそのころのお話も何か興味深いことがあればぜひお願いいたします。

**【後藤】** 一気に話せないで、少しずつ話させていただこうかと思っています。はじめに、農業経済を勉強するようになったこと、それからアフリカに関心をもつようになったことからお話しします。はじめ私、慶應大学で学生やっています、恐らく大林さんや森泉さんと一緒だったんだらうと思いますが、



(後藤晃氏)

経済学部で。でも次第に経済学は自分には向かないような気がしてきてあまり授業に出なくなった。ですから授業に出ない学生の気持ちがわからないでもない。まじめな学生じゃなかったということです。高校で文学関係の部活をやっていて小説もどきものを書いたりして、さすが大学に入ってからには自分に才能がないことに気づいていたので、その当時の文学のテーマだった「政治と文学」とか戦争体験論とか、転向論とかいうことをぐじゃぐじゃ友達とやっていました。

今につながるものでは、大内力という経済学者がいますね、大内兵衛の息子の。彼の『農業問題』というのが岩波全書で出ていて、それを苦勞して読んで長々とレポートを書きました。自由課題の宿題だったのだが、これをきっかけに何となく農業経済や経済史に興味をもち始めました。こんな話でいいのかしら。

**【司会】** はい。とても興味深いです。転校されたいきさつなど、お話しいただけますか。当然入学試験があったわけで、どのように克服されたかもお聞きしたいです。

**【後藤】** 昭和39年に慶應で大学紛争がありました、慶應で。ご存じないかも知れませんが、授業料値上げ反対の闘争でストライキに入ったのです。それが1月10日だったと思います、大学側と執行部で取引があったともいわれていましたが、紛争が終わって大学が長期の休校に入ったのです。なんだか気が抜けてね、それで受験し直すことにしました。弟が受験生だったこともあって。化学と生物の教科書を買ってきて、理科は勉強していなかったから、弟に教わったりして。

**【柳澤】** 1月からですか。

**【後藤】** 2カ月あった、丸々。3月の3日が1次試験で、2次試験が3月の半ばぐらいだったのかな。よく覚えていないけど。

**【司会】** そんなに後ろでしたっけ、そのころは。

**【後藤】** そのころだったと思いますよ。生物は常識の領域が多かったけど、化学は大変だった。学校が休校になったことで転校したということですね。

もう一度1年生からという訳ですが、大学の授業が始まる初日、日韓のデモにつれていかれた。日韓

条約反対のデモです。最初の日にですよ。国会議事堂の前の議員会館が建築中で、そこで機動隊に追われた。そのとき、中国近代史をやっている濱下っているでしょう。

【司会】 濱下武志ですか。

【後藤】 彼がいつも正門近くで毎日アジテーションやっていた。

【司会】 濱下さん、そんなことをやっていたんですか。今はもうあの分野では泰斗となりましたが。

【後藤】 それで、高校のとき一緒に文学やっていた友人が駒場にいたもので、彼とあと3人ぐらいで、アフリカのサークルを作り、そこで南アフリカのapartheid、人種隔離による差別ですね、この問題と関わることになりました。ネルソン・マンデラ、ノーベル賞をもらった南アフリカの闘士です。彼は当時すでに刑務所にいました。それから30年ぐらい刑務所に入っていましたけど。1960年に多くの国が独立したが、アフリカは日本人には当時はまだまだ未知の世界だったから、アフリカにも歴史はあるんだと啓蒙的なことも言っていたような気がします、若かったから。

その頃、メンバー数人でマーガレット・シニーの『古代アフリカ王国』という本を訳しました。そうしたら理論社の小宮山さんという社長から本にするといわれ、プロフェッショナルがかなり手を入れたとは思いますが出版されました。理論社は子どもの本で知られていたけど、当時はアフリカの本も多くは翻訳でしたが出版されていました。エンクルマの自叙伝とか『ブラックマザー』とか。野間寛二郎さんや五味川純平さんなどが中心になっていた集まりもあって、小宮山さんも参加していましたね。それに学生の私たちも参加させてもらっていた。このことが関係していました。それから澤地久枝さん、『妻たちの二・二六』の、あの人まだ若くて、いつも五味川純平さんと一緒にいて、かなりきつい発言をしていた、当時から。

数日前にネットで確認したら、アマゾンで1万2800円の値がついていてびっくりしました。あれが最初の業績かも？翻訳だけ。

上原淳道さんもそのサークルにいました。駒場の中国近代史の先生で、上原専禄の息子です。その先

生に、これからアフリカ研究をやっていききたいので、とアドバイスをもらいに伺ったら、「君ね、アフリカは食えないよ、インドだって最近市民権を得たばかりなんだから」と冷たくあしらわれた。がっかりしましたね。だけど、それから大学院の修士課程の終わりまでしばらくアフリカに関わってきました。

【司会】 東大はその頃も2年夏までの成績で学部3年からの専門を決める進振があったと思うのですが、大学院まで後藤先生はどのような進路を歩まれたのですか。

【後藤】 アフリカ研究をやろうとしていたことで、進学は農業経済とほぼ決めていたが、やはり迷いました。国文に行こうか建築に行こうかとも。成績とも関係ありますが、選択できる範囲内だったから。

【司会】 国文、建築、農業経済、全然違うじゃないですか。

【後藤】 違うんだけど、自分にとってはそれぞれ意味があるんだよね。人生の分岐点だね、そういうとき。ちょっと失敗したかなと思っている。国文はやらなくてよかったと思うけど、建築をやっていたらちょっとまじになったかなというのはある。とにかく農業経済を選んだんです。研究者になろうと、その時は。

【司会】 3年次に農業経済に進学された後はどの先生のゼミナールに所属されたのですか。

【後藤】 古島敏雄という日本経済史の先生です。大学紛争の時代だから先生に対して失礼なことも多々ありました。紛争中でしたがゼミはやっていました。当時、研究室の助手をしていたのが富岡さん、富岡倍雄さんです。まだ面識はなかったのだけど学生のゼミに時々顔をだしていました。

先生が、ゼミで何をやりたいかと学生に問うたものだから、私も生意気な季節だったので、フランス・ファノンをやったらどうかと提案したのです。フランス・ファノンは西インド諸島出身の黒人の精神科医で革命家だった人物で、36歳で死ぬんだけど大変な秀才なのですね。少し前に彼の本『地に呪われた者』が翻訳されていました。植民地の状況、植民者、被植民者を精神科医の目で鋭く分析した本で、大学紛争時に大きなテーマとなっていた知識人

論を考える上でのテキストになりえる本だったので、先生に紹介してゼミでやることになったのです。何回目のゼミか忘れましたが、知識人批判が議論されていたときに、私が大先生を前にして、先生も同罪ですよってやっちゃった。そうしたらゼミの後、富岡さんに呼ばれて、ちょっと君、失礼じゃないか、とかなり厳しく怒られました。彼と話したのはその時がはじめてです。

**【司会】** もうその頃から富岡先生とは縁がつながり始めたわけですね。学部卒業には卒業論文が必須であったと思いますが、学部の卒論のテーマはどのようなものだったのでしょうか。

**【後藤】** 4年次に書いた論文は2つあるんです。一つは大学院に入るための論文です。紛争中だったので大学院入試は学科ごとバラバラで農業経済は論文だけでした。夏休みに図書館に通って書いたから提出は9月か10月だったような気がします。南アフリカの人種隔離政策、アパルトヘイトと1913年の土地法という内容の論文です。隔離による差別がどのように展開していったのかを、土地問題、土地法の問題からまとめたものです。

卒論の方は、アメリカの黒人のアイデンティティーと文化というような内容だった。こんな論文では卒業できないのだが、紛争のどさくさだったから。気合を入れたつもりだったけれど、どんなことを書いたのか、手元に残っていないので詳しくは覚えていない。コピーがなかったから提出するとそのままだったね、当時は。

ファノンの影響もあったと思います。彼は、植民地において支配される人たち、植民地で白人になろうとした黒人などのアイデンティティーの問題にも関心をもっていた。『黒い皮膚・白い仮面』がその代表作です。ちょっと話がずれるけど、修士の学生のときにアメリカの黒人の学生運動のリーダー、ストークリー・カーマイケルという人が日本に来たことがある。世界で学生運動が活発だった時代だから日本でも名を知られていた。その人が来た時、富岡さんがブントとの関連もあったのかもしれないが、インタビューすることになって、ご一緒させてもらった。

彼の場合、黒人と白人は違う文化であり、アメリ

カはもともと白人の文化だから、自分たちは自らのアイデンティティーを求めて行動すべきだと主張したわけですよ。ネグリチュードとって。レゲエのラストファリ運動に近かったかもしれない。当時、西インド諸島のエム・セゼールという詩人とか、それからサンゴール。有名な黒人の詩人ね。そういう人たちはいわゆる黒の文化。白は美しい、黒は汚いという白人の価値観を裏返して、差別の社会の中で逆に黒は美しいということを見つけた、つまり異なる価値観をね。これもアイデンティティーの話なのだけど、そういう運動が非常に盛んになってきて。ストークリー・カーマイケルもそうした黒人のアイデンティティーを主張していた。ファノンはそののをすごく批判した。文化のルーツをたどるとかそういうことには。

**【司会】** 大学院に進学された後でも、学部の卒論の延長としてアフリカ研究を続けられたのでしょうか。日本経済史の古島先生とは研究分野の相違は問題にならなかったのですか。

**【後藤】** 研究対象がぜんぜん違いましたが、うけいれてもらいました。日本経済史の先生ですが、先輩にはヨーロッパやロシア、中国を研究対象としていた人もいた。一番下の方の弟子です。ちなみに松村さんと東大に移った松本武祝さんは孫弟子ね。古島先生の上の方の弟子の弟子。

そこで日本経済史とアフリカと、両方勉強させてもらって。地域研究の方法とか歴史研究の方法はその時代に先生や兄弟子に教わりました。先生に連れられて信州の飯田などに出かけていき、蔵の中の古文書の扱い方や読み方を教えてもらいました。今ではほとんど読めませんが。

先生とはいろいろありまして、団交の席で先生をつぶしてしまったことがあった。反省して先生の家に行き謝りに行ったんですね、個人的に。病気になるまで学校へ来られなくなったから。そうしたら石神井の家の玄関で奥さんが出てきて、あんたのせいで、と厳しく批判されました。そうしたら先生が出てきて、おまえの出るところじゃないって言って。そんなに責められなかった。

その奥さんが、その後ベルシャ語の辞書を書いたのです。ロシア語ができる人で、評価の高いベルシ

ヤ語ーロシア語の辞書を翻訳し、さらに追加して。イランの農業や植物、政治経済の語彙の本を集めて私も辞書作りに協力したのです。1000ページを超えた大作でしたよ。

先生と奥さんが自宅の火事で亡くなった。新聞にでかでかとお出ました。本も焼けました。そのうちベルシャ語の本は全部私のところに送られてきた。20箱ぐらい。半分以上は焦げていましたが、使えるものはイランに関わっていた人たちに分けました。

**【司会】** 古島先生が亡くなられたのは、私も覚えています。富岡先生に「今日の新聞に記事が出ています」と言ったら、驚かれて友人に連絡を入れていた記憶がありますので。古島先生の奥様とも不思議な縁が綿々と続いたわけですね。話を元に戻しましょう。修士論文は何を書かれたのですか。

**【後藤】** 西アフリカのナイジェリアのヨルバ族のマーケット、市の話です。西アフリカでは定期市が活発で、女の人が中心で農産物などを頭に乘っけて、今日はこっち、明日はあっちと出かけていき市の広場に商品を並べて取引する。もうけなんかほとんどなさそうで、商売というよりも交換といった方が適切な。また都市からも商人が商品をもってやってくる。共同体間の交換といったシンボリックの意味も持っているとも解釈できるし情報交換の場でもあって市には多面的な機能がある。これを経済人類学的手法で扱ったのです。

いまでもよく覚えています。K. Onwuka Dike という人の “Trade and Politics in the Niger Delta” の影響があったのでしょうか。とくに興味をもったのは、奴隷貿易の部分です。ヨーロッパ人が奴隷貿易のために西アフリカにやってくる。彼らはまず砦をつくる。海から陸地に向かって砦を構えるのだが、ここでアフリカ人と交換を始める。最初、ガラス玉みたいなとかそんなので始まり、インド製の布とか鉄砲を持ち込む。そして、要求するのが奴隷なのです。取引相手は近隣の部族。ヨーロッパ人は砦からは出ていかずに周辺の部族と取引をやるわけです。この交換を契機に、奥地に向かってアフリカ人による奴隷狩りが始まるのだが、この過程で部族社会に変化が生じ、部族共同体が奴隷狩りの縦の社会に編成されていく。奴隷貿易によるアフリカの大陸

が荒廃していくメカニズムですね。そんなことが経済人類学的手法で描かれている。

当時文化人類学が新しい学問として脚光を浴びていたこともありますね。修士の1年の時に、非常勤の先生、名前は忘れてしまいましたが、モースの『贈与論』というの、あれを1年かけてやりました。この影響もあったかもしれない。

人類学以外ではアフリカの研究をする人は非常に少なかった。少なくとも経済に関心をもっている人はアジア研究以外にはほとんどいなかった。慶應に矢内原勝という先生がいてアフリカにも関心をもっていたけれど。アフリカを専門にしている研究者が少なかったことで若輩者にとってチャンスもあったような気がします。上原淳道さんがアフリカやっても食えないよと言っていたけれど、案外食べたのかもね。

アジア経済研究所には4人いました。アフリカを研究対象としていた人が。みんな40歳前後で、研究者が少なかったこともあって彼らに面白いがられました。大学院に入ったばかりの時から共同研究グループに入れてもらい、研究双書にも書かせてもらいました。修士論文も手直して双書に載せてもらっています。アフリカで就職できたわけじゃないけど、研究する人が少なかったものだから、面白いがられたのです。お蔭で業績といえるものを3本書くことができました。アフリカ関係で。

**【司会】** 私のなかでは、後藤先生は中東研究者ということになっているのですが、中東研究はまだやっておられなかったのですか。



(山本博史氏)

**【後藤】** 中東のことはまったく頭にありませんでした。アフリカの研究をやりようとしていましたから。修士論文を書いているときですよ、大野盛雄という東京大学東洋文化研究所の教授から電話がありました。アフガニスタンの調査に行かないかって。学部ときにその先生の地理学科での授業に出たことがあって覚えていてくれたんですね。『東洋と西洋の間』という名著がある飯塚浩二の弟子にあたる人で、歴史学と地理学の境界に関わる授業をさしていました。科学研究費による地域調査へのお誘いでした。しかしちょうど修士論文を書いている時で、中東に関心があったわけでもないし、6カ月つぶれるのもきついで、すみませんと言ってお断りした。後でお聞きすると、農村調査のできる院生が欲しかったということだった。

それから1年経った博士課程1年の時にまた連絡をもらった。今度はイランで、「西アジア農村の人文地理学的研究」という科研の調査の誘いで、その2回目と3回目に参加させてもらった。総合調査だからいろんな分野の人が参加していた。地理学の隊長の他は、東大の畜産獣医の教授、京都の歴史の先生、気象学の先生、文化人類学の女性で。私はその端の端に引っ掛けてもらった。農業経済、土地制度の担当ということで。

**【司会】** いよいよ中東ですね。その科研の調査はどのように行われたのでしょうか。当時は外国に行くことは大変な時代だと思いますし、ましてイランの農村に長期にわたった滞在する調査はかなり困難があったのではないのでしょうか。

**【後藤】** まだ若かったから、土地にへばりつくように、村で農民がやっていることを観察し、ヒアリングして、土地を測って。土地は角度と距離で測るんです。伊能忠敬と同じ。中古の自転車を買ってきて。起点を決めてコンパスで北からの角度を測り自転車で何こぎしたかで距離で測る。これをノートに記し、そこからまた同じことを繰り返す。そして最後に起点に戻る。ズレが少なければ成功です。今みたいに宇宙から写真が撮れちゃう時代じゃなかったし、村の耕地の地図もなかったから、そういうふうにして数百ヘクタールの面積の土地を細かく測った。

この経験がベースになっている、私の研究の。地べたをはって。文献も地図もないわけだから。イランの農村はこういう制度ですよ、土地制度はこうですよとか、農村社会はこうなっていますよといった情報がないから、自分がやるしかなかった。それが基礎になっていますね。

**【司会】** 本格的に研究者の道が始まったわけですね。日本もまだ貧しい時代ですよ。当時の研究環境はどのようなものだったのでしょうか。

**【後藤】** 1回目の調査から1年後にまた別の調査に参加しました。延べ1年の調査でした。戻ってしばらくしてから東洋文化研究所の助手の採用試験を受けました。論文と面接の試験でしたが、論文で落とされました。翌年ずうずうしくもまた受けたらうまくいった。すでに結婚していて、収入が少ないため日々貯金が減っていったが、これでようやく経済が安定しました。博士課程2年での中退なのです。だから履歴書には修士課程修了と書くべきなんでしょうね。だけど博士課程中退と書いています、今まで。よくないかしら。この研究所はアジアが対象でアフリカはふくまれていなかった。アフリカから中東への転向はこんな事情によるのです。

東洋文化研究所の助手は7、8人だったと思う。梶村秀樹先生がこの助手をしていた。大阪大学の青木保とか。

**【司会】** 『タイの僧院にて』を書いた。

**【後藤】** 横浜市大の学長していた加藤祐三氏も助手になるちょっと前の先輩です。当時、東京外大の学長をやった池端雪浦、長崎暢子、佐藤次高、山之内正彦、原洋之助、伊藤亜人などが助手をしていました。すごい人たちですよ。

研究所にいるときにイランにまた行きました、1年間。学術振興会のお金で。ジャパン・インスティテュートとって日本の研究者が立ち寄りところだったので、ここにいて沢山のひと知り合いになれた。富岡さんも来ました。ここで神奈川大学へ来ないかって誘われて。研究所には6年いました。とにかく恵まれた環境で勉強させてもらいました。

**【司会】** 後藤先生は研究スタイル、方法論はどのようなものなのでしょうか。先生の論文を読みますと、経済史、農業経済、文化人類学、人文地理学などの分

野も取り入れたかなり学際的な研究だと思います。また、フィールドワークの比重が高い研究論文も多く、地域研究の枠では収まらないスケールの大きさを感じます。

**【後藤】** この3月に『オアシス社会 50年の軌跡—イランの農村、遊牧そして都市—』というタイトルの本が出ます。イランの一地方の大オアシス農業地帯の長期にわたる調査をもとにした研究書で、記録ということをも強く意識した本です。400ページ近くあり、写真も豊富です。イランだけではなくありませんが農村にコミットして調査なり研究をやってきて身に付いたのは、例えば村であるならその村と関わりながら等身大で眺め描いてって、そこから国家まで見通していく。こんなこと実際には不可能かもしれないが、言い換えれば生産と生活をその場で丁寧に追いかけていくと、国家の形までがなんとなく見えてくるということです。そのような見方が身についたような気がしています。私の書いているものは大体そんな書き方をしている。そのためか理論をあまり大事にしないところがある。いろんな理論、各国経済の研究室でも議論しましたよね、従属論とかウォーラステインとか、いろいろ。でもこうした理論はしばらくすると忘れられて、また焼き直して似たような理論が出てくる。新しい部分はそれほど多くない。実証主義者は理論化が得意ではないが、私自身もこっちの方かも知れない。実証主義というより具体性から考える主義ですが、それがいいのか悪いのかは別の問題として。

**【司会】** 帰納法的にやられるわけですか、いろいろな事例を。帰納法と言わない方がいいですか。

**【後藤】** 最初の出発したところは自分が勝ち取ったものというのかな、具体性のあるものというのかな、そういうところからこう考えていくという、そういうのが身に付いたといいますか。

**【司会】** 大体アフリカでもどこでも、イランでもトルコでもそうだと思うのですが、異文化ですよ。常に。例えば日本なら日本との対比にいつもなりませんか。

**【後藤】** もちろん比べているんですよ。

**【司会】** 無意識のうちに、結局はそこに行き着くんじゃないかというふうに。

**【後藤】** 当然比べているんだよね。

**【司会】** 地域研究というのは研究者にとっては異なった文化背景がある社会が研究対象ですよ。例えば、こういうふう人間関係が日本ではできるはずなのに、現地ではまったく異なった人間関係が創られている。その人間関係を分析する際、人間みんな同じよう行動するというふうを考え、差異を作り出す原因を研究者の所属する社会の価値観を押し付けるのではなく、現地の事象から再構成して探求する地域研究者が多いと思います。しかしなかなかうまくいかない。中東研究においても、フィールドワークの結果を研究成果にするときに軋轢があると思うのですが、どのように乗り越えてこられましたか。

**【後藤】** 少しずれるかも知れませんが、地域研究でたとえばイランの農村を調査するとヨーロッパの中世と形態において非常に似た制度なり事実に出合うことがある。西欧経済史をかじったものにはそこで驚きがある。しかししばらくとどまって観察し続け歴史をもたどってみると、まったく違ったものであることに気がつくことがあります。現象は同じなんだけど。理論先行の人はここで大きな誤りを犯すことがある。これは地域研究でしばしば気づくところですね。

もっとも誤りはこちらの語学力や現地の人との認識の違いからも生まれるから、勘違いによって思い込むということも起こる。中世ヨーロッパの制度と同じだなどと。知識があるがゆえの間違いですね。

私が経験したことでは、村の農民に紙と鉛筆を渡して村の概念図を書いてもらったことがある。彼らが村の領域をどう認識しているかを知るためですが、その後、例の中古の自転車とコンパスで測量してみるとまったく想像もできないほどの違いだった。面積で1割にも満たない集落とその周辺の庭畑が、彼が書いた地図では全体の半分以上を占め、身近な日常の空間が大きく描かれていた。地図はわかりやすい事例だが、価値観など無形のことになる誤りは気づきにくい。つまりそういう意味では、現場から見て積み上げていくといいながらも、それさえまゆつばかもしれないという難しさがある。でも長くやってきたことで間違えることが少なくはなっ



た。自分が確かだと思えるところから、おおげさだけれど全体に思考を広げていく、そうしたやり方が身に付いたということです。

**【司会】** 現地主義というのでしょうか、そのような研究スタイルですよね。アジ研なども現地に長時間滞在して研究するというのを推進してきましたが、今はかなり難しい状況になっていると聞いています。後藤先生がこのような研究スタイルを確立された原点はどこにあったとお考えですか。

**【後藤】** そういうやり方を教えられたのは古島先生からのような気がします。農業経済研究科はもともと社会科学系大学院だったが、彼が農学系に変えた。社会科学系じゃ駄目だと言って。農業経済に関わる研究するのに農協までしか行かない、また役所で資料をもらって話を聞くだけではだめだ。そうじゃなくて、村まで行って、場合によっては土までいじくらないと分からないことがたくさんあるんだということです。これを実践する場をイランの農村調査で与えられた。何もないからそうせざるを得なかったのだけど。

**【司会】** 机上の空論を戒めることは今も大切ですね。

**【司会】** 先生の研究分野に移民研究があると思うのですが、少しお聞かせください。どのような問題意識から、この分野を研究対象とされるようになったのですか。

**【後藤】** 移民についての関心は、一つはアイデンティティーの問題です。本来は社会学のテーマですけど。ブラジル移民も満州農業移民も、移住した人

たちの意識の変遷のようなものです。あとで少しお話しますが。経済とは直接関係はないが関心ももち続けています。

もう一つは日本の裏面史との関係です。日本からの移民は国の政策とからみしばしば棄民と呼ばれ暗いイメージがこびりついている。歴史の教科書ではほとんど無視されてきましたが、日本の近現代史を正しく認識するには欠かせない。とくに関心をもってきたのは満州農業移民です。『ユートピアへの想像力と運動』という2001年に出版された本に載せた「満州農業移民とユートピア」という論文は今でもファシズム研究者や植民問題に関心をもつ研究者が話題にしてくれています。

大正から昭和にかけて時代の農業社会は階級対立が激しく貧困問題も深刻であったことはご存じと思います。そういう時代に、5.15事件が起こり日本のファシズム化が進行するのだけど、農村の問題をどう解決していくかは、当時の農林官僚、キャリア官僚、農本主義者、軍部で利害が必ずしも一致しない。でもそれが満州に農民を送るところでなんとなくまとまる。

窮乏化と階級対立による農村の危機に対しては、農林官僚は自力更生運動を主導し、精神主義で農村を組織化させて更生させようとしたのだが、村の共同体としての実体は崩れているから精神主義ではうまくいかない。農本主義者は農本主義者で夢を抱いているわけです。農村はこうあるべきだと夢を語るわけです。そうした農本主義者と農林官僚と、それに満州経営を目指す軍部の意向が満州農業移民でつながる。当初国策として計画されたのは100万戸、500万人の移住で、分村の形で満州へ送ろうとしました。結局戦争に負けて、実際満州に行ったのは二十数万人だったが。

論文で扱ったのは、満州にどういう村を作ろうとしたか、そのため国は何をしたか、そして農民はどうしたか、ということです。そこでイメージされたのが、日本で解体していた村の満州での再興、現実には存在しない理想型としての共同体、これを満州に作ることだった。どういうものなのか、簡単に言えば階層分化の生まれない平等を原則とした村です。大学の研修所がある富士見村、今は町ですがこ



こも分村移民を送った村で、<sup>こうと</sup>神戸という集落から移住した人にインタビューしたときの話では、「まったく共産主義の村だった」ということです。それから協同組合。協同組合主義的な性格をもたせ、そこに民族を付着させるわけですね。つまり民族共同体、強固な民族共同体としての村を満州に作るという。そんなものは日本には存在しなかった訳ですが。

日本における分村移民の村については歴民の森武磨さん。あの人が専門にしていますが、私の関心は、満州に理想型としての村を作ろうとした官僚や農本主義者、ファシストのイデオロギーにありました。

ユダヤ人がパレスチナに移民して作ったキブツというのがありますね。キブツとかモシャブとか。パレスチナの土地にはもともとアラブ人が住んでいるわけです。そこに移植して村を作るわけです。どういう村かという点で完璧平等な。キブツは共産社会、モシャブは協同組合主義。絶対に階層分化が生まれにくい共同体的な村です。これが排他的で強固なイスラエルの基礎になるんですね。これは満州に作ろうとした入植村とよく似ています。ユダヤ人の場合はユダヤ教という宗教があって、村の真ん中にはシナゴグが建てられた。アラブ人とは共存しないという強い意志ですよ。日本も五族協和なんていったけれど、日本人の民族の村を移植していく、それを基盤に面として日本を移植することを目指した、少なくとも農村では。そういうイメージの村を目指した、イデオロギー的には。ですから中東研究者もパレスチナ問題との関連で関心をもってきている。

**【司会】** 満州（中国東北三省）に関して日中関係で気になることがあるので、後藤先生がどう考えているか教えてください。満州で計画した500万とかにはならなかったけれども、10万単位で行っていたわけですよ。

尖閣をめぐる日中関係が悪くなった時に知り合いの中国出身の研究者と研究会で話していて、満州の人たちというのは割と親日、あるいは親日ではないかもしれないけど、少なくとも共産党の宣伝には乗らないとその研究者は言っていました。彼らは。

台湾と共通しているようなところがあるというんです。後藤先生の先ほどの話だと話がかかなり違ってくるとなりました。その中国出身の研究者は日本の統治下で中国人はそんなにひどい目に遭わなかったし、日本の統治は結構ちゃんとしていたんだ、みたいなことを言います。

だから、日本人が例えばソ連が参戦してきて逃げ帰るときに、子どもが置いていかれたとしても育てたんじゃないかということ彼は主張します。日本人を本当に憎んでいたら殺していたんだからと言われて。そう言われると、多くの孤児を育ててくれたと妙に納得した経験があります。その研究者によると、対日の関係が悪くなったときにも、中国人で旅行に来るのは、多くが東北三省の人たちだというわけです。その人は既に日本に帰化したので、そのことが影響しているのかもしれませんが、満州の人たちの多くは共産党が反日をおおっても乗らないと主張します。そうすると、さっきの五族協和とかではなくて、満州移民は現地の人と軋轢を作り出すような気がします。

**【後藤】** 南満州鉄道の防衛もあって、移民をその周辺に張り付かせていくわけだけど、既存の村の住民を排除して作るが多かったから攻撃を受けることも多かったのではないですか。土地から排除された人たちからです。全体として親日的な人が多いということですが、その人がいた環境でも違うんでしょうね。どこにいて、どういう状況で日本人と接したかという。

理想型としての日本人の村が実際にはできなかったということもある。満州に広大な土地を割り当てられても経営するのは不可能です。北海道農法を導入しようということも考えられたが、現実には現地の人たちを雇って農業をせざるを得なかった。とくに戦争が始まると男たちが徴兵されたことで労働力は不足し、より強く現地人に依存せざるを得なくなった。だから閉鎖型の民族共同体なんてできなかったんですね、実際には。

**【司会】** 満州では対日観はあまり悪くないと言われています。しかしそこに住んでいる人を土地から排除していくと、えらく恨まれるような気がするのですけどね。

【後藤】 恨まれたんじゃないですか。

【司会】 当然そうなりますよね。自分たちの生活基盤を追い立てられるんだから。ちょっとやそつとの恨みじゃないですよ。

【柳澤】 土地はそうですね。奪われてしまうとね。

【後藤】 私が問題にしたのは移住させた官僚や農本主義者、ファシストのイデオロギーであり、作られた村で農民がどう生きたかは別のことなのね。いいかえれば日本の入植政策は失敗したといつてよいのでしょうか。入植村での農業経営は中国人に依存しなければできなかったのが実態だから。

【司会】 中国研究者はどのように考えているのでしょうか。

【柳澤】 僕の妻の母方も吉林の方の地主だったみたいですけど、その点で何か言われたことはとくにありません。妻の祖父に当たる方が数年前に90近くで亡くなったんです。最後は少し老人性の痴ほうのようになって、うわ言のように昔のことをしゃべるんです。それがどういう記憶につながっているのか、知りたいなと思ったんですけど、ちょっと手遅れでした。ただ、地主だったそうで、恐らく共産党にいじめられた側の人間だったこともあって僕への対応がマイルドだったのかなという気がします。

【司会】 個人個人で違うのかも。すみません、ちょっと変な方向に話題をもつていってしまいました。

【後藤】 入植村の移民資料は、吉林省の長春にたくさんあります。買ってきましたが。どういうのかというと、敗戦時に関東軍が焼却して逃げるわけですね。民間人を置いたまま。それが全部焼ききれないで残ったのです。それを掘り出して整理した中国人の老先生がいて一つ譲ってもらいました。まだ何もしていませんが、これは私の退職後の仕事になるでしょう。

【柳澤】 ライフワーク。

【後藤】 国家の問題としてだけでなく移民として移住する個人の問題、これにも関心があります。とくにアイデンティティーについてですね。国は国でそこに神社を作ったり民族主義を鼓舞したりするわけだけど、移住した人たちはどういう意識でいたのか、その意識は大きく揺れ動くわけですが。そこら

辺のところも興味があります。ハワイ移民やブラジル移民と比較をしながら。

【司会】 後藤先生はブラジル移民についても研究されていますよね。先生の研究全体からはブラジル移民研究はどのような位置にあるのですか。

【後藤】 研究とまではいかないけど、日系人については、移民でブラジルに渡った人も出稼ぎで日本に来た人も、とくに一世と二世はアイデンティティーの葛藤があります。研究所にいたときですがブラジルのサンパウロ大学から留学生が来ました。彼女は日系二世で、自分のアイデンティティーに悩んでいました。親や先生から日本の話を聞いていて、日本人の血が肉体的にも文化的にも流れていることを強く意識していたということです。しかし日本に来てみたら全く違う日本人がいた、余裕がなくあくせくしている。ということで、顔は日本人だが自分の中に日本人はいないと認識し、ブラジル人を自覚して帰国しました。

日本に出稼ぎで来ているブラジルの日系人の調査もやりました。この大学でロシア語を教えている遠坂さんから紹介された二世の人とも会いました。その人もやっぱり同じだった。夢を抱いてやって来たのに日本が嫌いになっていた。彼の場合、日系人の少ない都市にいたので、ジャポネとよばれて区別されていたようなのです、差別ではなくて。その反作用で日本を強く意識していた。日本人は武士道精神があつて気概があるなど幻想が膨らんでいったのね。ところが日本へ来たたら、上司が間違っている誰も何も言わない、主張しない日本人ばかり、しかも自分たち二世を外国人扱いする。自分が何者かって考えちゃったわけです。

それならば日本人がかつてブラジルへ移民として渡ったときに、彼らは何を考え生きたのか。そんなことにも興味をもってきました。

【司会】 移民して行く人々の個人の意識の問題、アイデンティティーの問題に関心があるということでしょうか。他にも興味深い事例はありますか。

【後藤】 話がまたずれちゃいますが、遠坂さんに紹介された二世の父親は1930年にブラジルに移住しているんです。拓大を出ていて。もともとブラジルに行く目的で拓大に入った九州人です。当時、ブラジ

ルでも反日が強まっていた。それでも農業恐慌で農村からの排出圧力が大きく移民送出は続いていました。しかしブラジル政府からは、移住先がアマゾンならいいということで、未開のアマゾンに出掛けていくわけですね。とんでもないところに。

移民一般がそうだけど、その男も職を転々と変えて遍歴することになる。柔道が上手だったので警察で柔道を教えたり、プロレスの興行師になったりしている。彼の奥さんは20歳ぐらい年下で、今75ぐらいになるのかな、子どものとき山口県から移住する戦後移民です。その人から夫の話として聞いたことなのですが、彼はとにかく日本人、どこまでも日本人を貫こうとするんです。ところが戦争が終わった瞬間、つまり日本が負けた時から日本語は一切しゃべらなくなるんですね。完全にブラジル人になろうとして。これは戦前の移民の一つの類型です。

このファミリーが出稼ぎで日本に来ていて、親しくさせてもらっていますが、1世、2世、3世、4世とそろっている。でも皆違うんですよね、意識が。2世も兄と弟と違っている。それからその子どもも違う。日本人学校へ行った子とブラジル人学校へ行ったのとで、意識が全然違っていて。

そういうアイデンティティー、移民のアイデンティティーというのかな、それが日系人と付き合いで分かるのね。じゃあ、こっちからブラジルに渡った人たちは何を考えてきたのだろうか、すごい興味があって調べてきた。このファミリーについては一部『在日外国人と日本社会のグローバル化』という本に書いています。

**【司会】** 人文研から出された本ですか。



(柳澤和也氏)

**【後藤】** そう。あれに簡単ですけどね。

**【司会】** もうそろそろ神奈川大学のことについてどうでしょう。赴任された当時はどうでしたか。時間もあまり無いのですが、各国経済グループのこともいいですし、作問委員のこともいいですし。行政、教育とかお話しください。

**【後藤】** 赴任した時からずっとやってきた作問委員のことからいきましょうか。作問委員の仕事は楽しかったですね、昔は。

**【司会】** 楽しかった？

**【後藤】** 昔は楽しかった。ご存じない方もおられるでしょうが、諸田先生という経済史の偉い先生や、これまた偉い梶村秀樹さんや富岡さんが参加していて、議論がはずむんですね。本来の作業そっちのけで、歴史の話など議論になっちゃうわけですよ。終わらない。

**【司会】** そういう意味で楽しかったんですね。

**【後藤】** 終わらないと、責任者の岡島さんが続きはホテルでと、事務の責任者と交渉して。そんなことで、先輩からいろいろ勉強させてもらいました。今はだいぶ変わりましたね。

**【司会】** 負担を感じる先生が多いですね。嫌だ、嫌だという感じです。

**【後藤】** いつからそうなったのかな。ああいう時代がまた来るといいんだけど。

**【鳴瀬】** 昔は予備校のチェックもなかったですからね。おおらかといえばおおらかだったけど、作問も。

**【司会】** 先生は何年に来られたんですか。もう40年



(鳴瀬成洋氏)

ぐらいですよ。

**【後藤】** それでさっき履歴書をコピーしてもらって確認したら、神奈川県に赴任したのが昭和56年と書いてあった。

**【司会】** 1981年ですか。33年おられたということですか。

**【後藤】** 神奈川県にきたときは間宮さん、京大に行った間宮陽介さんと同室だった。9号館の5階で。今みたいに研究室が沢山はなかったの2人部屋でした。小さな事務机と袖のない椅子、それに電気スタンドがあっただけ。しばらくして独立の部屋になって、簡単なソファも用意された。今は新任の時からなんでも揃っている。揃いすぎね。

**【司会】** いろいろ恵まれた環境になったからと言って研究が進むというわけでもないですよ。逆にやっている気がします。昔は作問は楽しかったのですが、学内行政も今は違っていたのでしょうか。

**【後藤】** 神奈川県へ来て、学校の業務というのをあまりしていなかったような気がしている、50歳になるまでは。教務部委員と図書館委員をやっただけかもしれない。あとは記憶にないですね。カリキュラム委員会の夏の合宿ありましたね、あれも出たことがない。50歳になる頃かな貿易学科の主任をやらされて、それからはずっと何だかんだとありましたけど。それまで行政をあまりやっていない、いい時代だったな、何もしないで済んじゃったというところがあって。その代わり発言もしなかったけども。

**【鳴瀬】** 私も後藤先生の下で主任とかいろいろやったりしましたが、学部長のとき。

**【後藤】** 50からはいろいろやらされて。

**【鳴瀬】** 現職を作られたのも先生のときでしょう。改組されたのも。小林先生と一緒に。その意味ではやっぱり働いておられますよ。経貿研の所長もやられているし、アジア研究センターも。

**【後藤】** 尽くしていますよ。プラスかマイナスか知らないけど。(笑)

**【鳴瀬】** 貿易学科を改組しなきゃいけないというのはずっと懸案事項であって、誰も手を付けられなかったんだけど、後藤先生と小林先生のコンビで、えいや、という形でやられて、今は生きていて。



(横川和穂氏)

**【後藤】** いろいろ批判も受けているけど。(笑)

**【鳴瀬】** それもありますね。

**【司会】** 各国経済グループについてどうでしたでしょうか。私も各国出身者ですので、設立に至った経緯などいろいろ教えていただきたいです。

**【後藤】** 神奈川県にきたときは、各国グループは富岡さんと梶村秀樹さんと、院生を共同で指導する目的で作られた。それに遅れて中村さんが参加した。梶村さんは当時から朝鮮研究では著名で、韓国で最も知られた朝鮮研究の日本人だった。富岡さんも有名な人だった。60年安保をリードした活動家として。

**【司会】** そんな時代もありました。梶村先生は大学外でいろいろ活躍されていたようですね。

**【後藤】** 研究者の世界だけでなく。在日の人たちの信頼は大変なものだった。しかし各国グループをリードしたのは富岡さんでしたね。

**【司会】** 梶村さんのゼミとか何か。一橋などの院生がいっぱい来ていたという話だったわけですね。僕は知らないですけど。

**【後藤】** いっぱいかどうかは知らないけど、そうでしたね。私は各国経済グループがあってこれまで神奈川県にいたという感じがしています。当時、元気な院生がいっぱいいて。私が来たとき、新納、篠田、丸岡、鈴木という院生がいて。今、鈴木さんは。

**【司会】** 校長先生。

**【後藤】** ここの理事ですよ。

**【司会】** もう理事になっちゃったの？ どんどん偉くなっているな。(笑) 僕、鈴木さんの卒業論文もっています。いつか渡さないといけない。どこか

で会いたいなどは思っているんだけど、各国を整理したときに出てきて、さすがに捨てられなくて。すごいですよ。こんな厚さですよ。中村先生のところに出して。中村さんがここから退職されたときに、各国経済資料室に置いていかれたんだと思います。

【後藤】 それに、大東文化大学国際関係学部の。

【司会】 新納さんは今学部長じゃないですか？ まだ学部長でしょうか。

【後藤】 そう。篠田さんは研究科の委員長ですよ。

【司会】 そうですか。

【後藤】 大東文化の知り合いに、要職、神奈川大学で占められているよなんて言われた。その後、平塚の経営学部には丸岡さんは亡くなったし。菅原さん、藤村さん、大黒さんとか。あと、留学生が何人もいましたね。

【司会】 朴さんね。静岡にまだいるでしょう。朴根好さん。静岡大学の経済学部でアジア経済論をまだやっているはずなんだけど。

【後藤】 2週間に一回ぐらい研究会をやっていたんだね。外部から間宮さんとか、それから大瀧さん、東大の社研にいる。

【司会】 大瀧さんの仲人は富岡先生だものね。

【後藤】 共同研究による本を何冊も出している。白桃書房から『韓国経済試論』、世界書院から『発展途上経済の研究』と『近代世界の歴史像』。参加していないですかね。

【司会】 一番最後のに一つだけ参加しました。僕はちょっと来るのが遅かったんだ。

【鳴瀬】 それに梶村先生が編者の日中経済関係の本がありますね。

【後藤】 院生が元気じゃないと、難しいよね。

【司会】 もうそういう時代じゃなくなっちゃったので。

【後藤】 もう院生が来ることもないし、研究者を目指す。

【司会】 確かにあのころの各国の院生のレベルは高かったですよね。ちょっと考えられないくらい。私もいろいろ学ばせていただきました。そろそろ所定の時間ですが、後藤先生最後に何かございますか。

【後藤】 何か言い残したことはあるのかな。こういうふうにして自分のことを語らせてもらえる場とい

うのはなかなかないから。おかげさまで。そうだ、この本『中東の農業社会と国家』、10年前の話ですが賞をもらったんですよ。イランの大統領から。

【司会】 トルコじゃなくてイラン。

【後藤】 イランです。副賞として金貨が12枚あったけどね。当時の改革派の大統領から頂きました。あのは水戸黄門の印籠じゃないけど、どこでも行ける。賞状のコピーをもっていけば、ははあ、なんて言っただけ。

【司会】 短く、これからの展望というか、何をされるのか教えてください。

【後藤】 特に展望はありませんが、やりたいことはあります。やりたいことは、さっきも言ったように移民のことをやっていきたいと思っています。中東はもうやりたいと思わない。今度出版される本でおしまい。

【司会】 それはなぜなんですか。

【後藤】 エネルギーがあるので、やる元気がない。

【司会】 行かないといけないからということですか。

【後藤】 それもあるけれど他にもやるのがあって。それに長くできるものでもないでしょう、時間が。

【司会】 各国グループの先生が皆は早死にだったから、その分が残っているんじゃないかという気がしないでもないですが。

【後藤】 そうだね。梶村さんが54、富岡さんが68。

【司会】 中村先生は退職を迎えられた。けども1、2年で亡くなられた。大変だったですよ。最後のほうは授業も苦しうだった。

【後藤】 私もよくここまで生き延びていると思っていますよ。いろいろありましたから。私もやっぱり各国グループだから駄目かなと思ったこともある。(笑) 何とか持ちそうで。検査で今のところ大丈夫、何もないって言われているから。

【司会】 じゃあ、これからの先生の研究のさらなる発展をお祈りしながら、そろそろよろしいですか。時間になるので終わりたいと思います。

【後藤】 いろいろ聞いていただいて、ありがとうございました。(終了)